The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	ユートピアとよばれた都市 : ブラジリアと都市貧困層
Author(s)	奥田, 若菜
Citation	年報人間科学. 2005, 26, p. 155-175
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/25897
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

ユートピアとよばれた都市―ブラジリアと都市貧困層

奥田　若菜

〈要旨〉

十五世紀にトマス・モアの空想旅行記『ユートピア』が発表されて以来、ユートピア都市の物語は繰り返し再生産されてきた。多くのユートピア思想者によって創造されつづけてきたユートピア都市は、なぜユートピア（幻想）におわったのだろうか。

本稿では、ユートピア思想者らが描いたユートピア都市の限界を、一九六〇年に完成したユートピアとよばれた都市:ブラジリアの変化を追いながら論じていく。

ユートピア都市の描写の多くが、住民ではなく旅行者の視点からなされていることは注目すべき点である。旅行者の視点はある種の超越性を持っており、それは都市を上からの捉える視点である。彼らによるユートピア都市の描写からは、そこに実際に生きる住民の声が聞こえてこない。都市とは本来、住民が日常生活をおくる場であり、不均質性や匿名性をもつ、音にあふれた空間である。ユートピア都市実現の限界は、都市を全体社会から孤立した存在として描いたことにある。都市は自身の歴史を持たずに「歴史なき都市」となることはできても、全体社会の影響をうけずにいることは不可能である。現実社会に造られたブラジリアのユートピア性は、ブラジリアが歴史を持ちはじめ、生活実践の場としての性格を帯び始めると同時に、消えていった。

キーワード

ユートピア　ブラジリア　計画都市　不法占拠地　都市貧困層

I　はじめに

サウゾール以降［Southall 1973］、人類学の研究領域はそれまで対象としてきた「伝統的社会」だけではなく、階級社会や近代の都市なども含むようになった。本稿で取り上げるブラジル連邦共和国のブラジリア連邦区は、古くからの歴史をもつ交易都市、商業都市や王国の王都のような一般的な発生起源をもつ都市ではない。つまり、「都市的なるもの」・「都市らしさ」が、その歴史的経緯やそこに居住する人びとの社会的営みによって生みだされてきた都市ではない。わずか四五年前になにもない平原に「上からの意図」をもった計画書に従ってゼロから造り出された都市である。ブラジルの人類学者ルイス・ドゥアルテ・デ・シルバによれば、「ブラジリア建設は、ブラジルナショナリズムの古くからの夢で、その勝利の結果であり、近代化は二〇世紀ブラジル思想の歴史において国家アイデンティティ追求に関連している」［SILVA,L 1997:60］。また、アメリカの人類学者ジェームズ・ホルストンは、ブラジリアという新都市は、これまでと異なった合理的な社会実践のモデルであり、そのイメージ・デザインを足がかりとして、ブラジル全体の新しい社会秩序を作りあげ、国家発展の過程における最初の変化の青写真とする試みであった、と指摘している［HOLSTON 1989］。

本論では計画都市ブラジリアにしばしば付与される「ユートピア(i)」という性格に注目し、ブラジリアが四五年の時を経るなかで、ユートピア都市から現実都市への変遷をたどってみたい。そして、これまで創造されてきたユートピア都市がどうして現実化へと向かえなかったのかを明らかにしたい。

バチコは、ユートピアの夢は十五世紀以降、繰り返し再生産されてきたが、創造されるユートピアは、時代の社会的枠組みに制限され、同一のテーマの繰り返しを招いて常に似通ったものであったという。また、「ユートピアにおける都市の物語は、まさに物語」にすぎず、それによってますます抽象的で拘束的なものになる。しかしながら、だからといって「これらの都市が現実不可能で空想的であるという意味ではない」と述べている［バチコ 1990:333］。しかしながら、数多くの空想作家や建築家、都市計画家などによって描かれてきたどのユートピア都市も現在のところ現実化していない。なぜなら、都市は実際に人びとが生きる場であるのに、ユートピア都市では、都市がそこに生きる人びとの生活実践の場であることや、時を経るなかで変わり続ける都市としての一面が忘れられているからである。本論では、ユートピアと評された未来都市が、現実社会へとどのように根を下ろしていったのか、ユートピア思想者らが描かなかった「人びとが生活する場としての都市」をブラジリアを例に論じていく。

ブラジリア連邦区は、首都機能をもつパイロットプラン（プラノピロット）を含め二六の行政地区（Região Administrativa）に分かれている。本論では、ブラジリア連邦区に居住する人びとが日常的

に使う区分にしたがって、プラノピロットとその周囲の富裕地を「ブラジリア」とよぶ。また、公式文書では「衛星都市」(Cidade Satelite)という言葉はもはや使用されずに「行政地区」が使われているが、連邦区居住者のあいだでは「衛星都市」という言葉が現在も日常的に使われているので本論でもこの通称にしたがう。

II 「未来を語る都市」ブラジリア

ブラジリア建設は、「五〇年の進歩を五年で(50 anos em 5)」のスローガンを掲げた当時の大統領ジュセリーノ・クビシェッキによって実現された。クビシェッキ大統領は、メタス(目標)計画のなかで、ブラジルの開発を公約に掲げた。その主要な柱は、1)新首都ブラジリアの建設、2)全国の幹線道路建設、3)基幹工業の確立、という三点であった[中川・斉藤 1978]。一九五五年には正式に新首都建設地が発表されている。ブラジリアの建設工事は、一九五七年に着工され、三年後に開都式が行われている。一九八七年には世界遺産にも登録された。

ブラジリアが建設され遷都されてから四五年が経った。ブラジリアに関するこれまでの研究には、ブラジリアの計画都市としての性格に焦点をあてたものをはじめとして、都市工学的研究や社会学の分野に属するものが多い[例えば CARPINTERO 1998・EPSTEIN 1973・NUNES 2004・PAVIANI 1987, 1996, 1998]。計画に基づいた静的な都市として記述されがちなブラジリアだが、単なる都市計画に沿った一都市ではなく現在も日々変化し続ける都市である。その変化は当初の計画に沿って行われている都市構成(建物や道路などの建築、整備、現在でも当初の計画通りに行われている)から、計画から外れた移民による人口増加、衛星都市の拡大、不法占拠地の増加などがある。

ブラジリアはよくユートピア(Utopia)と評されている。ブラジルにおける国家主導の都市計画と、ユートピアや理想都市創造の概念は深くかかわりあっている。

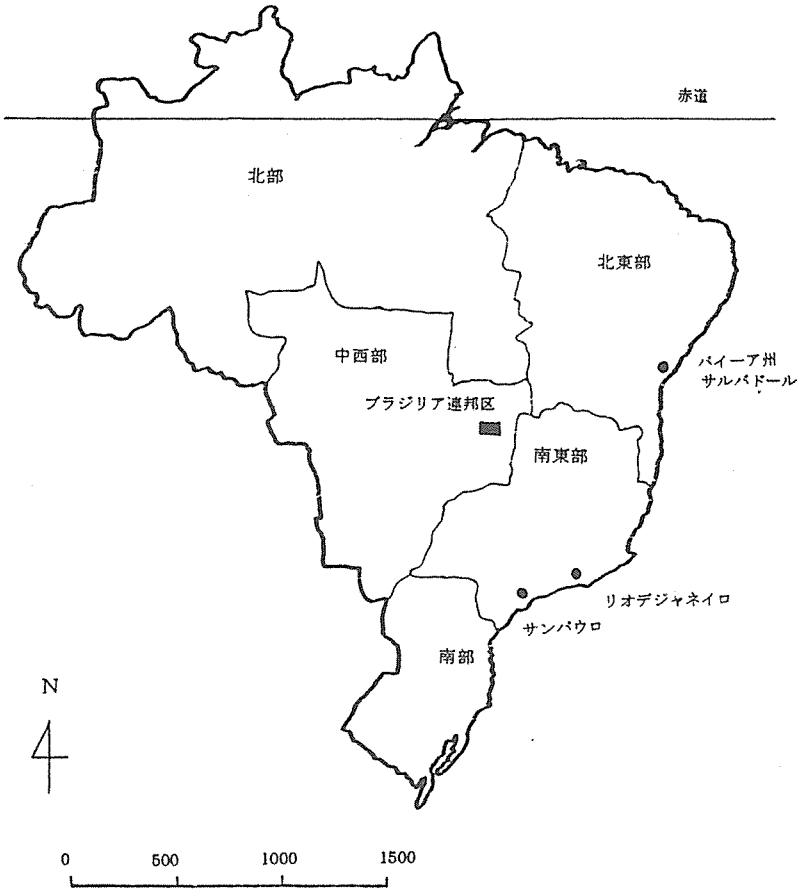
ユートピアとは「どこにもない国」という意味のトマス・モアの造語であり、同名の著書には彼のユートピア思想が余すことなく描かれている。その後、ユートピア思想者らによって多様なユートピア的都市計画が繰り返し描かれ続けてきた。バチコが指摘しているように、これらのユートピア都市には「想像上の社会の政治的、経済的、社会的体系の間にみられる相違が、都市の全体的なヴィジョンにはたいして影響を与えて」おらず、数々の共通性が確認できる[バチコ 1990:329]。ユートピア的都市の主な特徴は以下の三点である。1)都市の歴史的機能については従来のままで政治的・行政的・文化的中心である。そして描かれる場所は単に一都市ではなく「首都」である。2)ユートピア的都市は常に純粋であろうとし、「不具者」や「慢性病患者」、老人、犯罪者などは郊外の病院や養老院・監獄に追いやられている。3)すべての歴史を拒絶し、いかなる過去の名残も保持しようとしない[バチコ 1990]。

ユートピア都市のような抽象的な都市計画に従おうとすれば、そ

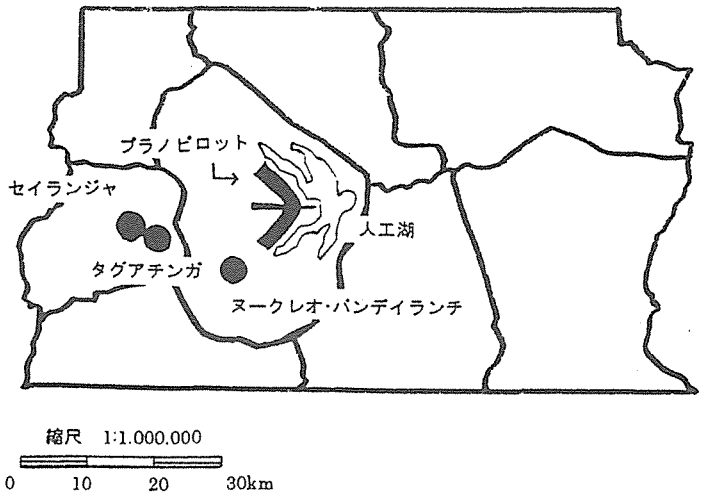
の都市は歴史を持たない都市にならざるを得ない。それこそがブラジルで実現されたブラジリア連邦区のプラノピロット（パイロットプラン）である。ブラジリアとユートピア都市の共通点はおおい。住居や建物の高さ制限、数多くみられる国家の象徴としての記念碑、都市と調和し美しく飾る建築物、街全体の分かりやすさ、などである。単純なデザインではなく飛行機という一風変わったデザインであるという点は異なっているものの、すべての街路には一〇〇番台から八〇〇台までの番号がつけられているため、異邦人(ii)［バチコ 1990:327］であっても迷うことなく位置を確認できる。

理想都市とよばれながらもブラジリアとは、反対に過去・歴史を

ブラジル連邦共和国



ブラジリア連邦区



つよく主張する都市もある。メキシコ独立運動開始からちょうど一〇〇年目にあたる一九一〇年、メキシコシティは都市改造により近代国家メキシコを象徴するコスモポリタンな理想都市へと姿を変えた。都市改造は当時のエリート層が思い描く「近代」を体現させ、ナショナリズムを高揚させる役割を担っていた［落合　1998］。ブラジリア建設の主な理由も、1）開発が進んでいなかった奥地の「征服」、2）近代都市ブラジリアを足がかりとした近代国家の樹立、3）進んだ国家を海外に向けて誇示するための近代都市＝理想郷（Utopia）の建設などが挙げられる［PASTORE　1969］が、両者の違いは、メキシコシティ（とくにシャンゼリゼを模倣してつくられたというレフォルマ大通り）が、近代化だけでなくエリート層によって再編された国家史を描き出す役割を持っていた［落合　1998］のに対し、ブラジリアは、過去の歴史よりも近代国家ブラジルの未来予想図を描き出すための都市であったという点である。ユートピア思想が元来、理想とされる「未来予想図」を描くことだったように、ブラジリアは「未来」を語る都市であった。ブラジリアにあるモニュメント、記念碑、建築には、過去・歴史を表すようなものはほとんど見られない。飛行機を模したデザインのブラジリアには近代的な建築物が立ち並び、人びとに国家発展の「青写真」をみせつけている。過去を描き出す記念碑などはみられず、かわりにブラジリア自体の歴史を描き出す記念碑が人びとのよく目にする場所に設置されている。ブラジリア建設・遷都を実行した当時の大統領の銅像は高い位置に掲げられているし、それ以外にも独創的な建築物(iii)（カテドラル・大学・国会議事堂など）そのものが、ブラジリアとブラジリアの歴史を語るものとして機能している。ブラジリアのこのような特徴は、都市を非歴史化するユートピア都市としての性格が表れている。

ユートピア思想、ユートピア都市の記述は二つの重要なレベルによってなされている、とバチコはいう。まず第一に「都市空間を支配する抽象的な原理の記述」からなっている。そして、第二に、「同じ都市空間について、個人的で経験的な時限から語って」おり、つねに「一人の散歩者の視点から捉えられた」イメージによって記述されている［バチコ　1990:334］。ここで注目すべき点は、後者の視点である。なぜ常に散歩者、旅行者の視点であって、それぞれのユートピア都市に実際に生きる住民の視線ではないのだろうか。ここに住民の視点の不在がみてとれる。このような旅行者の視点がユートピア都市を記述するために使われるのは、ユートピア思想がモアの「空想旅行記」にはじまったからだけではなく、もともと住民が生活するための都市として描かれてこなかったからである。生活の場としての都市性の欠如により、実現化されたユートピアでは「整備された秩序の都市」は住民のための秩序というよりも、支配のための秩序となっている。そして、その支配を容易にさせるのが「ユートピアにふさわしい住民」の選別である。

ユートピア的ヴィジョンをもつ都市は常に自ら純粋であろうとする。「自ら純粋であろうとする都市は、こうしてそれを汚す恐れのあるすべての悪を排除するのである」［バチコ　1990:333］。純粋であ

るためには、都市の住民を選別しそれ以外のものを排除していかなければならない。純粋性を保とうとすることは、ユートピア都市をユートピアとして保とうとすることである。ブラジリアではユートピア性を保つための選別と排除がどのように行われ、それがユートピア性の変化にどのように影響したのかを以下にみていきたい。

Ⅲ　連邦区における階層格差―中心部（プラノピロット）と衛星都市の断絶

ユートピア都市において市民は、それにふさわしい市民、つまり穏やかで礼儀正しく勤勉であることを期待されている。モアの『ユートピア』には以下のような記述がある。「（彼らのように）優秀な国民（中略）は他には見出しえない。（中略）かれらはみな上品で明朗快潑、聡明で落ち着いた生活をたのしむ人々である」［モア1957:125］。

ブラジリアではどのような人びとが「市民」であり、またどのような人びとがそうでないとされたのだろうか。新首都建設から現在に至るまで、土地問題はブラジリア最大の問題であり、かつブラジリアの性格を表すものでもある。土地を管理するということは、その都市自体、さらに住民自身を管理するということである。不法占拠地をめぐる問題を、主にセイランジャという衛星都市に焦点をあててブラジリアで行われた「市民」選別をみていく。

本論でいう「貧困層」とは、1）自らを「Classe Baixa」と位置づける、2）自己を「金持ち」（ヒッコ Rico、ブルゲス Burguês）と対比する、3）非合法市場などで働く、自家製の商品やまとめ買いした商品を道端で売るなどの、インフォーマルな職を持つ、4）友人・知人・親戚関係のネットワークによって職を得る、などの特徴をもつ人びとである。

Ⅲ-1　ブラジリア連邦区における土地問題と貧富の格差

新首都は、一九五七年に開始され、一九六〇年に完成している。首都建設をとりしきる公社として、新首都建設公社ノバカップ（NOVACAP）が設立された。わずか三年という短期間での首都建設のために、国内のいたるところから労働者が出稼ぎに集まった。特に経済的に貧しい北部・北東部からの労働者が多数を占めている。これら建設にかかわる労働者の町としてシダージリブレ（自由都市）が造られた(iv)。住民によってつけられたこの名称「自由都市」は、シダージリブレ内で税が一定期間免除されていたことに由来する。

「約束の地」ブラジリアへの出稼ぎについて元建設労働者は次のように述べている。

> 初めてブラジリアのことを聞いた時、皆に開放されているから、生活が苦しい人はブラジリアに行こうって話だったんだ。生活はよくなるし、政府は人道的で貧しい人たちを助けてくれる。ブラジリアを作り上げるために、俺たちの力が必要なんだって。

―元建設労働者　[CARVALHO 1994]

故郷はほとんど雨が降らないの。とても厳しい生活だったわ。ブラジリアで労働者を募集しているってきいて、今よりはいい生活があると思ってきたの。ブラジリアなんて聞いたことなかった名前でしょ。私にとっては外国だった。

―元建設労働者の妻　[CARVALHO 1994]

当時の政府は、首都が完成次第、建設労働者は出身地へ帰郷するべきだと考えており、そのために初期は単身の男性のみを労働者として受け入れ、家族総出の出稼ぎを好まなかった。また、労働者の町シダージリブレも首都完成後に閉村する計画であったので、町にあった教会、宿、銀行、パン屋、肉屋、レストラン、交通会社、ガソリンスタンド、スーパーマーケット、食料雑貨屋、織物屋、クリーニング屋、薬局、写真スタジオ、映画館、本屋、保険代理店、理髪店、製材所、家具製造所などは、すべて木造で暫定的な建物であった[SILVA,A 1971]。首都を目指しての国内移住が増える一方、プラノピロットへの入居は制限されていたため、建設完了後、元労働者や移住者たちはプラノピロットの周囲に集まって既存の小さな村などに集まった。これらの小集落は発展を続け、現在ある衛星都市の原形となった。

一九六〇年四月二一日、首都はリオデジャネイロからブラジリアへと遷都され、盛大な祝典とともに、新首都ブラジリアが動き始める。建設期間中、シダージリブレの名で知られていたヌークレオ・バンデイランチは、首都完成後は正式名称で呼ばれるようになる。一九六一年には、衛星都市として正式に認められた(v)。

連邦区への移住者が増えるにつれ、シダージリブレの周辺には非合法の町ができ、拡大し始めた。シダージリブレに隣接し人口が最も多かったのがイアピイである。元建設労働者や建設後に首都へと移住してきた人々によって創り出されたこれらの町は、住民が経済的に貧しく、また基礎設備もなかったために、ファヴェーラ Favela（スラム）化していく。家はバラック作りで、失業者があふれ、衛生状態は劣悪であった。

不法占拠地が拡大していく要因の一つは、都市計画のずさんさである。建設労働者のための住居が十分ではなく、当初彼らは寮に住んでいたものの、家族の呼び寄せや結婚などで寮をでて、手近な土地を不法占拠して家を建てていった。また、建設労働者のほかに、首都へ仕事などを求めて移住してくる人々の居住地も用意されていなかった。不法占拠地拡大のその他の要因として、建設労働者の経済状況がある。単純労働者として働いていた人々は、首都建設後に仕事を得ることが難しく、バラック以上の家を建てたり、不法占拠地以外で家賃を支払って間借りすることが不可能であった。

ブラジリアの周囲に「黒いしみ」[住民の発言　筆者によるインタビュー1　2003] をつくるような町が存在することを嫌った政府は、これらの町を「不法占拠者の町」と位置づけ、排除・根絶の対象とした。近代化を推し進めようとする政府や知識人にとってこれ

らの町は貧困、犯罪、無教養、無気力などブラジルの「現実」、負の部分をみせつけるものだったといえる。ブラジルの他の大都市サンパウロ、リオデジャネイロ、レシフェなどに必ず見受けられるファヴェーラ（スラム）は新しい計画都市にあってはならないものだった。

一九六九年、政府の中央高原発展協会（CODEPLAN）が「連邦区の非人間的居住区根絶のための意見書―イアピイ IAPI―ヴィラテノリオ Vila Tenolio 不法占拠者居留地」を発表している。エプスタインによると、非人間的居住区（Subhabitation）とは、以下の七つの条件のうちすくなくとも三つ以上に当てはまる地区である。1）木材または他の安い素材による簡易建設、2）簡易取り付けのトイレ、3）不適当な素材または修復不可能なタイルの屋根、4）土製の床、5）電気の欠如、6）水道管の欠如、7）十分な間取りの欠如と不衛生［EPSTEIN 1967:119］。

イアピイの住環境はエプスタインの条件にあてはまっている。「向こう（イアピイ）はまさに不法占拠地だった。電気も水もなかったし、建物は全部木造だった。」「下水道も完備されていなかったし、電気もモーター電気だけだった」と、元イアピイ住民は証言している［筆者によるインタビュー2　2003］。

中央高原発展協会の意見書では、ブラジル国内で、一九四〇年代からの急速な産業化と都市化の過程において国内移民が急増し、都市部に居住者の割合は一九四〇年では総人口のわずか三一％だったのが、一九六〇年には四六％、一九六六年になると五七％にまで増加したと推定されている［CODEPLAN 1969:3］。また、ブラジリア連邦区では首都完成の一九六〇年に一三万三千人だった人口が、わずか九年後には五一万六千人にまで増加している。

意見書によると、新首都への移民は大きく三つのグループに分類される。第一グループは、技術者や土木作業員などの建設労働者、第二に連邦区の職員などの公務員、第三に新首都へよりよい生活を求めて移住してきた人である。ここで意見書が問題としているのは、主に第一と第三のグループ、つまり北部や北東部から労働者として移住してきた、専門的な職を持たない社会的周辺層の増加である。これらのグループは、低く不安定な賃金で働き、家を買ったり借りたりすることができないために、法的に認められていない土地にバラックなどで仮の住まいを作り、不法占拠者となっている。また、不法占拠地が拡大していく一因として、行政地区として合法的に認められている各衛星都市が、仕事のあるプラノピロットから遠く不便である点や、不法占拠地の問題に取り組む有力な組織が欠如していることなどを挙げている。不法占拠地の実態を把握するために一九七〇年に行われた調査によると、不法占拠地全体のバラックの数は一万四六〇七戸で、不法占拠者は七万一二八人である。そのうち最大の不法占拠地であったイアピイには一万二六一戸、四万八千八三六人が生活していた［LOPES 2001］。

一九六九年、非人間的居住区根絶の対策として、イアピイなどのファヴェーラ（スラム）を政府の計画にそって移転させるために、不法占拠者根絶計画（Campanha de Erradicação das Invasoẽs）が立

案された。のちに、この略称ＣＥＩと土地を意味するLandia（外来語：英語のLandに由来）とが結合してできたCeilândiaが、新設される衛星都市の名称として定着した［LOPES 2001, RESENDE 1985, VASCONCELOS 1988］。

のちにセイランジャで起こった住民運動のリーダーの一人は、政府によるスラム強制移転を以下のように表現している。

> イアピイからの移転は、観光客が見て美しいと思うように、首都を綺麗にしておくためのものだった。働いて首都を創り上げた人々はこっちに移転させられた。セイランジャへ、まるで野原にごみを捨てるかのように移住させられた［CARVALHO 1994］。

一九七〇年十月十四日、連邦区社会事業課による移転行政団体（Grupo Executivo de Remoção）が設けられ、住民の移転事業を担うこととなった。移転の主な目的は、1）貧困層の生活環境を改善し、連邦区コミュニティーの一員として統合される可能性を提供すること、2）不法占拠者の保健衛生の改善、3）不法占拠者の社会的向上、4）ブラジリア都市計画の保護、の四点である［AMMAN 1991］。

約八万人の不法占拠者らは、セイランジャへの移住計画に対して強く抵抗し拒否を続けた。彼らが仕事についていたプラノピロットから遠く離れていること、イアピイなどの、現在住んでいる町ですでに築かれている人間関係を失うこと、などが主な理由である。よりよい生活水準・職などを求めて、故郷を離れ首都へと移住してきた国内移住者にとって、セイランジャへの移住は、再び不確実で不安定な生活に戻ってしまうことを意味する屈辱的なものであった。政府が提示した移転後の条件（住民として合法的に登録・低価格での区画の購入・政府の主導で整えられる基礎設備、など）も、抵抗をやわらげる要因にはならなかった。元イアピイ住民は、強制移住に抵抗した理由をこう述べている。「当時、私はここ（セイランジャ）には来たくなかった。向こう（イアピイ）はとてもよかった。仕事にいくのも自転車でいけたし、とてもよかった。静かだったしね。落ち着いていたし、暴力もなかったよ。あるとすればカシャッサ（サトウキビの酒）を呑んだときだけだったな」［筆者によるインタビュー3　2003］。

一九七一年三月二七日、プラノピロットから三五キロ離れたセイランジャへの移住が開始された。連邦区行政当局によってトラックが用意され、移住作業がおこなわれた。セイランジャ初期移住者によると、当初は生活に必要なものは何もなかった。中心部へ向かう公共交通手段も十分ではなく、水も八日に一度、配水車によって届けられるのみであった。

> 政府がよい場所を（移転先として）選んでいて、私たちの区画が確保されているって聞いたわ。水も電気も交通手段も学校も、全部あるから、心配するなって言われたの。私たちは騙されてここへ来たのよ［Pro-Gente 1981］。

私がここに着いたとき、真っ暗で何もなかった。水も電気もなにもない荒地だった。皆ここに投げだされて、地面には、区画を示す四本の杭が打ち込んであっただけだった。住民自身がそこに家を建てていったんだ。こんなに何もないなんて知らなかったから驚いたわ［筆者によるインタビュー4　2003］。

不法占拠者強制移住完了には約九ヶ月かかり、計八万人のファヴェーラ住民が移住していった。建築家ネイガブリエル・デ・ソウザ（Ney Gabriel de Souza）によって計画された最も古い地区に続いて、一九七〇年代には、セトルO（Setor O）、グアリロバ（Guariroba）、セトルペスル（Setor P Sul）、セトルペノルチ（Setor P Norte）などの各地区が造られ、その後も各地区は拡大を続けている。［Machado e Sousa 1998］。

Ⅲ-Ⅱ　セイランジャが意味するもの

移住条件として約束されていた水や電気、下水道などの基礎設備の完備には何年もかかったため、その間住民は厳しい生活を余儀なくされた。移住直後には政府関係の支援により、炊き出しなども行われた。

水は五年後に完備されはじめて、電気は六年か七年後だった。バスに乗るのも一苦労だったし、病気になればプラノピロットまで行かないと駄目だった。ここ（セイランジャ）には何もなかったのよ。［筆者によるインタビュー5　2003］。

水道が完備されていなかった頃は八日に一度、配水車がセイランジャを回っていた。その後、水道はまず中心部に設置され、その後、各ブロックに一つずつ設置される。また、住民の多くはブラジリアに職を持っていたが、ブラジリアへ自転車で通えた不法占拠地と違い、セイランジャからブラジリアは自転車や徒歩で通える距離ではなかった。しかし、公共バスの本数は十分ではなく、バス停はメインストリートだけにあったため、住民は多大な負担を強いられた。

電気が来るまでにとても時間がかかったよ。三年ぐらいかな。でも電気が来た地区もあれば、そうでない地区もあった。水も来るのが遅かった。配水待ちの列ではいつも喧嘩がたえなかった。順番のこととかね。女の人が、他の人が頭に載せていた缶を壊したこともあった。公共交通も中心部にバス停があるだけだったし、本数も足りなかった。何個目かのバス停につく頃にはバスは満員でね、乗ることなんて出来なかった。バス停にいるときに、バスの昇降口で喧嘩が始まると、私はすぐ諦めたよ。苦労ばかりだった。当時は苦労ばかりだった［筆者によるインタビュー6　2003］。

住民らは、水や電気・公共交通の整備を求めるだけでなく、生活をよくするためにゴミ回収などの問題に関しても運動を行い、成果を勝ち取ってきたと語る。数年後にはセイランジャ中心にそびえたつ貯水タンク（Caixa d'Agua）が完成し、水の安定した供給が可能となった。二〇〇〇年のブラジル地理統計院（IBGE）の調査によ

ると、セイランジャは、ブラジリア連邦区に十八ある行政地区のうちで最大の人口約三四万三〇〇〇人（十六・七％）の人口を有する地区である。

土地問題に関する、貧困層に属する元建設労働者と行政側の土地問題に関する戦いは、セイランジャへの移転後も幕を閉じていない。住民による最大の運動が、公社テハカップに対する住民運動「セイランジャ不屈の住民運動」（ASSIMOC）である。ASSIMOCによる住民運動は、一九七一年に不法占拠地からセイランジャへ強制移住させられたセイランジャ初期入居者が、公社による区画の譲渡価格の値上げに反対して起こしたものである。

新首都建設を担った連邦区土地管理公社ノバカップ（NOVACAP）は、セイランジャへの移住条件として、住民が移転後に「記号的価格」（Preço simbolico）で区画を購入できることを約束していた。この「記号的価格」とは、「未亡人や退職者、どんな賃金労働者でも支払い可能な低価格」という意味合いがあった。区画の購入価格に関する取り決めは、一九七一年七月二九日に公示されたノバカップの官報の決議事項（Resolução）七五／七一に明記されている。

一九七二年十二月、連邦区の土地管理を一手に担っていたノバカップの一部業務を分離するため、テハカップ（ブラジリア不動産公社TERRACAP）が創設される。移転後の区画購入手続きは、ノバカップによって順番に呼び出された住民が支払いのための手続きを行うという方法がとられていた。この呼び出しと購入手続き業務も、一九七二年十二月以降はノバカップからテハカップへと受け継がれた。一九七一年から一九七三年までの間に、計五〇〇〇区画が正式登録されている。

一九七四年、テハカップは呼び出しと購入手続きの一時停止を発表する。新たな政策を確定するというのが理由であり、呼び出しの再開は時宜を得て行われるので、住民はそれまで待つように、と通知した。しかし、テハカップは一九七九年中頃、呼び出しを再開しないまま区画の大幅値上げを発表する。このため、一九七四年までに呼び出しをうけて支払った住民と、そうでない住民の間に大きな不公平が生じ、これに不満を持った人々が住民運動を組織していくこととなった。テハカップは土地価格値上げについて、利息と通貨価値修正、セイランジャの土地の価値が上がったことなどを理由に挙げている。

住民運動組織は「不屈のセイランジャ住民組織（ASSIMOC－Associação dos Incansaveis Moradores da Ceilândia）」と名づけられた。一九七九年にASSIMOCが各方面に送った支援要請文書には以下のように書かれている。

ここで問いたいのです。約束された価格を支払った人がいる一方で、非常識な価格を支払う人がいるのは公正なことでしょうか？皆、同じ時期に移転したのに？私たちは本当に何度も何度も地域行政に足を運んで区画登録手続きについてたずねたのです。でも何も行われませんでした。彼らはただ「待つように」というばか

りでした。そして待ちに待った挙句が、この不公平なのです。

一九八〇年に出されたASSIMOCの会報によれば、移転時に提示された区画の価格は六〇〇から一〇〇〇クルゼイロだったのに対し、値上げ後は三九〇〇〇から五一〇〇〇クルゼイロに上がっている。住民はテハカップによる区画値上げを、政府による貧困者の排除として捉えている。

テハカップは、セイランジャがよりよくなった（価値が上がった）からこのような価格にするといいます。でも私たちが荒地をきれいにし、雨の中バラックを建てていったということを忘れるべきではありません。私たちは水道代も電気代も支払っています。私たちが密林に命を与え、美しく整えたのです。今、九年もの苦しみを経て、私たちは追いやられようとしています。テハカップが請求する金額を支払うことが出来ないからです。(vi)

もう空へ飛ぶしかないのです。この大地に貧困者の生きる場所などないのですから。(vii)

ASSIMOCとテハカップ側との間で話し合いがもたれたものの、両者の妥協点はみつからず、住民によるテハカップに対する訴訟（連邦区財政第一法廷—第三一六三五〇号）が、一九八〇年五月二六日に始まった。一九八三年五月、裁判闘争は七度の判決の延期をへて、裁判官エジムンド・ミネルヴィノによって住民勝訴の判決が下される。一九八五年八月、四六八家族の最終的な勝訴が確定し、テハカップとの間で契約の書類をかわした。

現在でも、次々と新しい不法占拠地が増え続けている。特に二〇〇四年は、連邦区政府がその対策に乗り出し、いくつかの不法占拠者を合法的に登録して区画分譲を行っているため、新規に不法占拠地に流れてくる人々も少なくない。連邦区政府は不法占拠者の新しい居住先として主にセイランジャの一部地区を提供している。（例えばヴィラフェリス（Vila Feliz）、ヴァルジャン（Varjão）、ペレザン（Pelezão）などの不法占拠地からの移転）[Correio Braslilense/Jornal de Brasiilia 二〇〇四年九月一〇日付]。約三〇年前と変わらず現在も、セイランジャは不法占拠者の場所として機能している。

また、連邦区の場合、不法占拠は貧困層のみによるものとはいえない。業者が不法に公地を富裕層へ売却することも問題になっている。富裕層が、公地と知りつつ（もしくは知らされずに）購入し居住するといったことが広く行われており、後にその土地が合法化され地価が高騰しはじめた後に、売却するケースもある。このような富裕層の不法占拠は、「不法占拠地」（Invasao）問題としてではなく「合法化に向けたプロセス」のみが問題とされ、強制移住の対象となる事例は見られない(viii)。

住民らに、「悪用する者アプロベイタドール」（Aproveitador）と呼ばれる人びとも存在する。彼らはすでに連邦区内に持ち家があっ

たり、貧困層ではないにもかかわらず、複数の地域で不法占拠を続けて、その土地が合法化されたときに、区画の権利が与えられるのを待つ人びとである。自分自身で、時には人を雇い公地に寝泊りさせている。筆者が二〇〇四年に訪れたある不法占拠地では、質素なテントの側に貧困層では購入できないような車が横付けされていた。

場所取りとしての不法占拠、もしくは公地に邸宅を建設するなどの富裕層による不法占拠地は、ここ一〇年の間で急増したと連邦区住民らはいう。富裕層の不法占拠に関して不満をもらす住民も多い。「もう不法占拠は貧困層だけのものじゃない。ブルジョワ（Burgues 金持ちの意）だって広い土地に勝手に家を建てている。バレーボールのコートまであるような大きさだ。それなのに、彼らの不法占拠地には公共サービスによる下水道まであるんだ。電気もそろっているし。貧しい我々の地域はしょっちゅう停電するし、他の貧しい（合法）地区にはまだ下水道も整備されていない。撤去されるのは貧困層の不法占拠地だけだ。」[筆者によるインタビュー7　2004]。

Ⅳ　ブラジリア連邦区の地図

一九六〇年の遷都以降、多数の国内移民がブラジリアへと押しよせた。富裕層との社会的区別が明確になるにつれ、ブラジリアは、後にニーマイヤーが認めたように、ブラジルの他の大都市と同じような差別の都市となっていった。エプスタインが指摘するように、ブラジリアを設計したコスタのプランには、ブラジル上流階級（Upper Class）に広く受け入れられている偏見的なイデオロギーが忠実に反映されている[EPSTEIN 1973:13]。富裕層は、自らが大多数の国民とは生活の面でも物質的な面でも区別され、孤立した存在であると認識しており、近代的新首都を目指して都市計画を行った政府の意図に反して、ブラジリアはブラジルが抱える社会問題を映す鏡となっていった。コスタは、首都完成から二八年後の一九八七年に、ブラジリアの現実を目の当たりにして以下のように述べている。

> 私は様々な「現実」に驚いていた。中でも私を驚かせたのは夜の（ブラジリア内循環や衛星都市への）バスターミナルだった。（中略）そこは人びとの家であり、彼らは所かまわず座り込み、時には衛星都市に帰りもせずにちびちびと酒を飲んでいる。そこは私が思い描いていたような「都市の中心で洗練されたコスモポリタンな場所」とはかけ離れていた。しかしながらこの中心地を実際に世話しているのは彼ら、首都を建設した真のブラジル人たちなのだ。彼らが正しいのであって、私が間違っていた[CODE PLAN 1991]。

不法占拠地の強制移住にみられるような政府による市民の選別は、衛星都市と中心部に現在居住する住民の相互認識にどのような影響をもたらしたのだろうか。

ブラジリア連邦区で生まれ育った世代の階層意識を例にみてみた

い。ブラジリア連邦区の中心部であるブラジリア住民は、衛星都市と中心部ブラジリアを明確に区別している。政府機関や銀行、各省庁など首都機能が集中するブラジリアには主に富裕層が居住しており、仕事や新しい豊かな生活を求めて首都へ移住してきた貧困層の集まる衛星都市住民との意識的な分断は著しい。

プラノピロットに最も近い衛星都市は、車でわずか五分程度の位置にある。現在ある衛星都市の中には、経済的に豊かな衛星都市もあり、高級住宅が立ち並ぶところもある。しかし大半は、経済的に貧しい生活を余儀なくされている。

ある上流階層の若者A（二〇代後半）は、非識字者にあったときの驚きを語った。「選挙当日、投票所の運営にあたっていた。その時、一人のお婆さんが投票にやってきた。彼女は、とりあえずマリアMariaとしておこうか、自分の名前を書くのにすごく時間がかかった。一文字ずつM、A、R、という具合にゆっくりゆっくり確かめながら書いていった。一生懸命自分の名前だけを練習してきたんだろうね。名前を全部書き終えるまでにとても時間がかかった。それをみて、僕は衝撃をうけた。非識字者に会うのは初めてだったから。彼女の姿に感銘をうけたよ」［筆者によるインタビュー8 2002］。

Aはブラジリアの高級アパートに両親とともに生活する学生である。ブラジリアで生まれ育ち、休暇にはリオデジャネイロやサンパウロなどへ飛行機で旅行に出かける。リオデジャネイロなどでファヴェーラを目にすることはあるが、居住地であるブラジリア連邦区で、貧しい衛星都市に行ったことはない。

ブラジリア連邦区で行われた青少年に対する意識調査によると、衛星都市とブラジリアの若年層の間では、互いに「あちら」「こちら」、「彼ら」「我々」という言葉を使って違うグループ・世界として認識している。ある学生は、衛星都市に行ったときのことを振り返って、「行ったことがあるわ。でもあまり気に入らなかった。よくわからないけど、向こうの人とは違うみたい。私は向こうに属してないの。皆が私を見ていたし」と語る。衛星都市の住人は、ブラジリアには「冷たく、すましている」人が多いように感じられ、反対にブラジリアの住人にとっては、衛星都市の住民が「暴力的」に見える。意識調査では、五七・九％の若者が、ブラジリアよりも衛星都市のほうがより治安が悪いと答え、また衛星都市で蔓延する暴力の理由として五八・二％が学校・職などの欠如をあげている［Waiselfisz 1998］。

ブラジリアに住むある学生は、「リオデジャネイロではファヴェーラがあっても街のなかで（富裕層と貧困層が）入り混じっているけど、ここ（ブラジリア）では分離されていて、ここにいるかぎり中上流層としか交流がないので（貧困層も存在するという）実感を失う」、と語っている［Waiselfisz 1998］。また他の学生は、衛星都市とブラジリアの関係に関する質問に対して、「乞食（Mendigo）たちを衛星都市に投げ出して、役に立たないものは（ブラジリアから）取り除く」と答えている。また他の学生は、「いつも乞食とかそういう人をつかまえて、（ブラジリアを）きれいにして、彼らを衛星

都市に置いてきた。でも最近はそれが難しくなっている。道を歩けば貧乏人を目にする。以前はなかった。ブラジリアは初めの頃に持っていたコントロールを失いつつあるんだ」と述べている［Waiselfisz 1998］。

衛星都市を一種の「掃き溜め」として見る人々もいる一方で、ブラジリア連邦区の階層間の分断を危険視している人もいる。

プラノピロットや高級住宅街に住んでいる人は、われわれ貧困層（Pobre）の現状を知らない人が多い。目を向けようとしてないんだ。同じ階級（クラッセ Classe）で集まっているからね。彼らが金持ちとして生まれたことは、もちろん彼らの罪ではない。おめでとう、と言ってあげたいぐらいだ。（拍手をする）ラッキーだったのだからね。問題は、こっちに手を差し伸べようとしないことだ。同じところに（富裕層が）集まっていて、こちらのことを知ろうとしないことだ。―セイランジャ住民［筆者によるインタビュー9　2003］

上流階層の若者Aの例でも、彼は非識字者（貧困層）と会う機会がないままブラジリアの富裕地区で生活している。前述の学生の言葉にもあるとおり、ブラジリア連邦区では、ブラジリアと衛星都市間の相互の行き来がないために貧困層の生活が見えず、ブラジリア住民は周囲（衛星都市）に貧困層が存在するという実感を失っている。しかしながら、ここで注意しなければならないのは、ブラジリア住民（富裕層）からのみ衛星都市住民（貧困層）が「見えない」という点である。富裕層が衛星都市に行き、経済的に貧しい衛星都市の生活状況を目にすることは少ない。しかし、衛星都市住民はブラジリアの生活を見ている。富裕層が貧困層と日常的に接する機会は少数の場に限定されている。例えば、貧困層がメイドとして従事する富裕地区住民の家庭、馬をつかってごみを収集する道端、靴磨きの子供が客を探して歩き回るバスターミナルや人の集まる場所、主に子供が飴やガムを手に売り歩いたり、時にお金を乞うたりする飲み屋やバーなどである。また車が信号で停止した際にミネラルウォーターやお菓子を車の窓際に売りにきたり、曲芸をしてチップを頼みにくるのもよく見られる光景である。このような場は、両階層が接する場というよりは、貧困層から富裕層への一方通行の歩み寄りである。

衛星都市の中でも経済的に貧しいとされるセイランジャに関していえば、住民の多くはブラジリアで家政婦や大工、バス運転手などの職についている。そのため毎日のようにセイランジャとブラジリアを往復している。ブラジルの他の大都市では、ブラジリアと同様に両階層の接触が一方通行だとしても、隣接しているためにその存在は富裕層からも認められる。しかしブラジリアでは距離的に離れているために明らかな一方通行となり階層間の断絶が起こる。富裕層には貧困層の存在が不可視である。しかし、「見えていない」ということと、「意識しない」ということは別である。実感を失い、貧困層の生活実態を知る機会を持っていないだけであって、貧困層

の存在を全く意識していないわけではない。「われわれ」とは違う「彼ら」として、明確に区別を行っている。

プラノピロットと衛星都市の分断を肯定するにしろ、否定するにしろ、両者に共通しているのは、ブラジリアを「ガラスの器」、「守られた都市」[Waiselfisz 1998:231]として捉えていることである。衛星都市住民とブラジリア住民の両方が、ブラジリア連邦区を階層社会、各階層が分断された場所であると認めている。相互に「われわれ」と「彼ら」を対象化するそのような認識は、富裕層の居住地と貧困層の居住地が隣接しているリオデジャネイロでも同じようにみられる[北森 1998・DAMATTA 1997]。

サンパウロやリオデジャネイロの都市社会においても、またブラジリアにおいても強い階層意識が存在する。富裕層と貧困層が分断されているブラジリアでも、富裕層と貧困層が互いに可視的なリオデジャネイロでも、それぞれの階層の区分は明確である。ブラジル人類学者ダマッタは、ブラジル人は、全員が法のもとに平等であるという建前があると同時に、社会的区分もあり「それぞれが自分の分をわきまえる」必要があると知っている、という。社会階級による上下関係は、(外国人や純粋な子供から隠さなければならないような)ブラジルの厳しい現実であり、カーニバルと同様、ブラジル性の一つなのである[DAMATTA 1997]。

ブラジリアでは、貧困層を地理的に離れた場所へと追いやることでユートピア性を堅持しようとした。プラノピロットと富裕地区で構成されるブラジリアのみを考えれば、計画にのっとったユートピアが実現されているといえるかもしれない。そこに居住できる人びとは政府の思惑通りの「豊かなブラジル市民」のみである。しかし、そのような市民の生活のみでは、都市として機能していない。衛星都市からブラジリアに通う家政婦や、道端で果物や野菜、串焼きなどを売る人々、駐車場で車を誘導し小銭を稼ぐ人びと、そういった人びとなしにブラジリアの生活は成り立たっていないからだ。ブラジリアは、衛星都市も含んだ連邦区全体として一つの完全な都市となっている。そのようなブラジリア連邦区全体を考慮すれば、ブラジリアはユートピアというよりもすでに一つの現実都市、既存社会に取り込まれた都市である。たとえ地理的に離れて相互が不可視化された都市であっても、その全体的枠組みは他の大都市とかわっていない。

V おわりに

バチコがいうように、ユートピアという言葉にはすでに「幻想」という意味が付与されている[バチコ 1990・467]とするならば、繰り返し再生産され詳細に描写されてきたユートピア都市がなぜ幻想と終わってしまったのかを明らかになければならない。それを解明する鍵として「過去」があるだろう。

ユートピアがユートピアとして存在しつづけていくためには、孤島や都市国家であると同時に過去を断ち切る必要がある。ブラジリアを例にみてきたように、理想都市創造の意図や観念が、既存の社

会秩序の否定の上になりたち、理想都市が既存社会の正反対のものとして構成されたとしても、ユートピアがモアの描いたような島国、つまり「都市国家」のようにひとつのユートピアが全体社会を構成している場合でない限り、都市は既存の社会全体の制約を受ける。計画都市であっても、その社会全体のシステム、構成、社会状況、文化などの諸要因の影響を受け、時を経るごとに当初の計画から外れていく。既存社会の制約や影響から逃れるためにはユートピアは、過去を断ち切った場所につくらざるをえない。

しかしながら、過去を断ち切った場所は、人びとの生活の場にはなれない。都市とは単に高い建物が立ち並ぶような器だけの場所ではない。人びとが実際に日常生活を送ったり、もしくは賑わいや娯楽を求めてやってくる活気のある場である。器があるだけでは都市とはよべない。都市の生活の場としての性格は、場の歴史的深みによって、「通常仮定されるような空間の機能性や、その機能性から発想される計画性を裏切るところから発している」[松井 2004：134]。人の生活の場である限り、都市はその都市自体の歴史を捨てて「歴史なき都市」になることはできても、その社会全体の歴史から逃れることは不可能だ。

ユートピア思想者らが数多くの、しかし似通ったユートピア都市を創造し続けてきたにもかかわらず、人びとの暮らしを生き生きと描くことをしてこなかった。それは単にしなかったのではなく、そのような過去を忘れた都市では人びとの生活は描けなかったからだ。ユートピアと呼ばれたブラジリアが、そのままユートピア都市であり続けることは不可能であった。遷都後にブラジリアで起こった富裕層と貧困層の間の問題は、ブラジル社会の典型的な一面である。ブラジリアでは貧困層の排除を行い、純粋性を追求しブラジリアのユートピアとしての純粋性を追求しようとした。しかし四五年の時を経た今、ブラジリアにユートピア都市が完成しなかったことは明白である。富裕層は貧困層の排除を行ったものの、他の大都市と同様の問題を抱える都市となり、中心と周辺という住み分けは、かえってブラジル社会が抱える階層社会という問題を顕著に映し出す結果となった。地理的な距離の違いはあるものの、階層意識をみるかぎり、連邦区全体の構造は他の大都市となんら変わりのあるものではなくなっていることが確かめられる。それはブラジリアがあくまでもブラジル社会に所属する一都市だからである。ブラジリアで起こった土地をめぐる富裕層と貧困層による争奪戦と、解決されない両者の経済格差とつよい階層意識。このような過程と現状によってブラジリアは「幻想」の都市から現実社会のうちに存在する都市となった。

もはやブラジリアはユートピアではない。人びとの生活実践の場としての都市である。当初の計画からは逸脱かもしれないが、都市とはなんであるかを考えれば、ブラジリアで起こった計画外の諸問題や歴史は、「ユートピア都市」が「人びとの生活実践の場」となったことを示している。ブラジリアのユートピア性はブラジリアが歴史を持ちはじめ、生活実践の場としての性格を帯びると同時に、消滅し始めていった。

不法占拠者の強制居住地であったセイランジャは今や連邦区最大の人口を抱える衛星都市である。二〇〇四年の調査では近年ブラジル全体の所得が下降ぎみであるにもかかわらず、セイランジャ各家庭の平均所得は上昇し、非識字率も低下しており、今後も大幅な成長が予想されている[Jornal de Brasilia 紙二〇〇四年八月二七日付]。現在も、北東部や北部から多くの国内移民がおしよせ、連邦区内の不法占拠者が移住するセイランジャは、貧困からの脱却の実践地となっている。彼らは何を求めて都市にやってくるのか。貧困者にとっていまだ不利な社会的構造のなかで、セイランジャ初期移住者や新規の移住者は、どのように貧困からの脱却、生活の向上をある程度成功させてきたのか。そして、貧困者を恒常的に貧困の枠にとどめる社会構造の枠組みを打破する彼らの日常実践とはどのようなものであるのか。貧者は常に貧者であるというような貧困の再生産からの脱却の可能性を示すこれらの考察を今後の課題としたい。

注

（i）[BURSZTYN e ARAUJO 1997]、[MIRANDA 1985]、[EPSTEIN 1973]、[Presidencia da Republica 1958:55]など。

（ii）『革命とユートピア』

「まったくの異邦人であっても、この都市について何か教えてもらう必要はまったくないだろう。建築それ自身が普遍的な言語、秩序だった形態をもつ言語で語ってくれるからである。個人住宅はすべて四階建てであり、そのために整然とした美観が保たれ、かつ田園から吹いてくる新鮮な空気の流通が確保される。これは衛生のための絶対条件である」[バチコ 1990]

（iii）ルシオ・コスタ:ブラジル近代建築の巨匠。Le Corbusier ル・コルビュジエ[スイスの建築家・画家・都市計画家・理想の近代建築や近代都市を提唱]の影響を受ける。コスタはブラジリアについて以下のように述べている。「ブラジリアは国家の記念的建築物、権力の象徴、建築物の展示の場などであるが、それだけではなく、快く、活き活きとした都市である」[CARPINTERO 1998]。オスカー・ニーマイヤー:建築家。国連ビルの設計者として知られている。ブラジリアの建築物について以下のように述べている。「変わったスタイルの建築物を作るという趣向により、今日ブラジリアを訪れる人たちにこう述べることができる。『あなたはブラジリアの大建築を眼にするだろう。例えそれを気に入ったとしても、または気にいらなかったとしても、"（それらの建築物に）似たものをこれまでに見た"ということだけは出来ない』と」[GDF: Secretaria de Turismo- Civic and Architectural Tourism: Brasilia]。

彼らの設計による主要な建築物は以下のとおりである。

三権広場：コスタによる構想／ニーマイヤーによるデザイン。

PLANALTO PALACE：ニーマイヤー作。ITAMARATY PALACE: ニーマイヤー作。連邦最高裁判所：ニーマイヤー作。法務省：ニーマイヤー作。国会議事堂:二八階建てのツインビル、両サイドに上院下院。ニーマイヤーの代表作。カテドラル：十六本の支柱に支えられた王冠のような珍しいデザイン。　ニーマイヤー作。テレビ塔:二二四Mの塔。飛行機の胴体部分にあり、国会議事堂・カテドラル・各省庁などを一望できる。パリのエッフェル塔がモデル。一階部分に展示場。コスタ作。大統領府:「高原の宮殿」。ガラス張りの白い建物。前に「労働戦士の像」（建設労働者を記念）。国立劇場:ニーマイヤー作。バスターミナル:コスタ作。JK 記念館:ニー

マイヤー作。

(iv) 現在は衛星都市のひとつとなっている。正式名称は Nucleo Bandeirante。

(v) 本論ではシダージリブレの名称を使う。

(vi) ASSIMOC が大統領に宛てた嘆願書より　一九八〇年六月二十日。

(vii) ASSIMOC の支援要請文書より　一九八〇年六月二六日。

(viii) 連邦区全体で四〇万人ともいわれる不法占拠者がいる中で Invasao という名称は、貧困者の不法占拠地にのみ使われている。衛星都市のひとつサマンバイア（Samambaia）にある不法占拠地では、連邦区に長年居住する人びとが、現在政府による強制撤去と闘っている。彼らは「何度バラックを壊されようともここを動かない。朝にバラックが解体されれば、午後には再び私たちはここに戻って建て直すだろう。（長年居住していることによって生じる）自分たちの権利が欲しいだけだ」と述べている。

文献

AMMAN,Safira Bezerra. 1991 *Movimento Popular de Bairro.* Editora Cortez, Sao Paulo.

BURSZTYN, Marcel e ARAUJO, Carlos Henrique Ferreira de 1997 *Da utopia a esclusão Vivendo nas ruas em Brasilia,* Garamond, Brasília.

CARPINTERO, António Carlos Cabral 1998 B*rasília:Prática e Teoria Urbanística no Brasil, 1956-1998,* São Paulo.

DAMATTA, Roberto 1997 *Carnavais, malandros e heróis:para uma sociologia do dilema brasileiro* Editora Rocco Ltda, Rio de Janeiro.

EPSTEIN, David G 1973 *Brasília: Plan and Reality,* University of California Press, California.

HOLSTON, James 1989 *The Modernist City: An Anthropological Critique of Brasília,* University of Chicago Press, Chicago.

LOPES, Wilon Wander 2001 *Ceilândia Tem Memória: Em Três Décadas, brasileiros de todas as origens fizeram, no Planalto Central, uma das maiores cidades do Brasil* KLK Comunicação, Brasília.

MACHADO, Maria Salete Kern / SOUSA, Nair Heloísa Bicalho de 1998 *Ceilândia: Mapa da cidadania,* Universidade de Brasília, Faculdade de Direito.

MIRANDA, Antonio 1985 *Brasília Capital da Utopia,* Thesaurus, Brasilia.

NUNES, Brasilmar Ferreira 2004 *Brasília: A fantasia corporificada,* Paralelo 15,Brasília.

PASTORE, Jose 1969 *Brasília: A cidade e o Homem,* Editora Nacional e Editora da USP, São Paulo.

PAVIANI, Aldo (org.) 1987 *Urbanização e Metropolização,* Editora Universidade de Brasília, Brasília.

——1996 *Brasília : Moradia e Exclusão,* Editora Universidade de Brasília, Brasília.

——1998 A *Conquista da Cidade : Movimentos Populares em Brasília,* Editora Universidade de Brasília, Brasília.

RESENDE, Mara L.S. 1985 *Ceilândia em Movimento,* Departamento de Sociologia Universidade de Brasília, Brasília.

SILVA, A. 1971 *Brasília, poeira e asfalto,* Editora Grafica Alvorada Ltda, Brasília.

SILVA, Luiz Sérgio Duarte da 1997 *A construção de Brasília : modernidade e periferia,* Ed. Da UFG, Goiânia.

SOUTHALL, Aidan 1973 *Urban anthropology: cross-cultural studies of urbanization,* Oxford University Press, New York.

VASCONCELOS, José Adirson 1988 *As Cidades Satélites de Brasília,* Centro

Gráfico Do Senado Federal, Brasília.
WAISELFISZ, Julio Jacobo 1998 *Juventude,Violencia e Cidadania: Os Jovens de Brasília,* UNESCO Editora Cortez, Brasília.
落合一泰 1998 「啓蒙主義の誘惑と拘束 <理想都市>メキシコシティの建設」川田順造編『岩波講座開発と文化4 開発と民族問題』岩波書店。
北森絵里 1998 「「貧困」の語り」江口信清編『貧困の文化再考』有斐閣、177-228。
斉藤広志・中川文雄 1978『世界現代史33 ラテンアメリカ現代史Ⅰ』山川出版会、1-39。
バチコ、ブロニスラフ 1990 『革命とユートピア 社会的な夢の歴史』森田伸子訳、新曜社。
古谷嘉章 2001 『異種混淆の近代と人類学』人文書院。
松井健 2004 「那覇の層位学 <都市的なるもの>の南島的形姿をめぐって」関根康正編『<都市的なるもの>の現在』東京大学出版会、134-161。
モア、トマス 1957 『ユートピア』平井正穂訳 第71刷、岩波書店。

冊子

ArPDF, CODEPLAN, DePHA - Brasília GDF 1991 *Relatório do Plano Piloto de* Brasília. Brasília.
CODEPLAN-GDF 1969 *Sugestões para erragicaçao de habitações sub-humanas do D.F. (Invasão do IAPI - Vila Tenório)* DITEC - Coordenação de Setores Sociais.
Presidência da Republica - Serviço de Documentação 1958 *Brasília e a opinião mundial,* Rio de Janeiro.
Pró-Gente (NGO) 1981 *Ceilândia, Ontem Hoje ...e Amanhã?*

映像資料

CARVALHO,Vlafimir(Diretor) 1994 *Conterrâneos Velhos de Guerra.*

新聞記事

1971 — 1985, 2004 Correio Brasiliense
1971—1985, 2004 Jornal de Brasília

インタビュー

1：二〇代女性B 元不法占拠者・現セイランジャ住民
2：五〇代女性M 元不法占拠者・現セイランジャ住民
2・3・6：六〇代男性E 元不法占拠者・現セイランジャ住民
2・4・5：五〇代女性M 元不法占拠者・現セイランジャ住民
7：五〇代女性A 一九八〇年代セイランジャ入居・現セイランジャ住民
8：二〇代男性C ブラジリア富裕地住民
9：三〇代男性X 初期セイランジャ入居者

Brasília: The Utopia and Urban Poverty

OKUDA Wakana

Since the publication in the 15th century of Thomas More's fantastic travelogue, Utopia, it's story has been reproduced over and over. Why do most of the utopian cities designed by utopian idealists ended in a utopia (illusion)?

This paper discusses the limits of the utopian city imagined by the utopian idealists as it compares it to the changes in Brasilia, the city laid out in the 1960s, which has often been called a Utopia.

It should be noted that the utopian city is usually depicted, not from the point of view of the residents, but from the visitor's point of view. The visitor's point of view enjoys a transcendent quality, that is, the ability to see the city in it's entirety from above. The residents' voices cannot be heard in the accounts written by utopian idealists. From it's beginning, the city has been not only a place for residents to go about their daily lives, but also a space overflowing with heterogeneous and anonymous sound.

One of the limits to the realization of Utopia is that it was designed completely separately from the society as a whole. Even if it were possible to build a "City without A Past", a city with no history, it would be impossible to remain isolated from the various influences of the society. At the same time as Brasilia takes on a history of its own, as it becomes a place of practical and every day life, built by an extant society, this city's utopian nature has vanished.

Key Words

Utopia, Brasília, Planned City, Squatting, Urban Poverty